

# 國家社會主義の國家改造を排す

御批判を乞ふ

片山廉平著

卷之三

三

目錄

## 國家社會主義の國家改造を排す

今、我が新興日本國家改造の黎明期に臨んで、識者の所説紛々たる試案の中に、或は金融資本國家統制説が有力視し、或は産業國家統制案が持出され、今亦後藤農相の御名案に成る農業國家統制案が閣僚間に提唱せられてゐると云ふ。

猶てその統制せられんとする方法如何の批判は之を後段に譲り、吾人の不可解に耐へ能はざる事は、近來或は識者の流行の如く矢鱈に使用せらるゝ「統制」と云ふ事である。一口に之を統制と云へば極めてその片付きが簡單であるが、元來此の統制とは如何なる意味か、之を通俗的に表現せば、「引きくるめる方法」と云ふのである、爰に

此の言葉を仮りて云へば、産業を引きくるめる方法、或は亦農業を引きくるめる方法、金融を引きくるめる方法と成るのである。

斯くては宛も背の高低も之を同一寸法に直し、或は世の貧富賢愚も一樣に押均し、之を中央政府に於て一括統禦すると云ふのが、國家統制と云ふ事の之に當倣ひべき言葉なのであらう。

若し、斯かる企圖の下に産業の國家統制が行はれるに於ては、その引きくるめる爲政者は無難であらうが、その反對に十把一束に引きくるめらるゝ者こそ甚だ迷惑千萬であり、而もその統制が眞の公平を缺くに於て由々敷問題の激成さるゝは敢て疑ひを入れざる所である。

爰に於て統制と云ふ事の眞の應用は部分的に用ひらるゝもので無く、例へば中央政府が地方行政に對し、大綱を示し、之を總括する上に自然統制と云ふ言葉が発生するのであるが、若し此の意味で無く國家が直接地方の自治體を指導監督する事の對策な



れば、統制と云ふ言語は甚だ不穩當の誹りを免かれざるべく、従つて地方生産に對する指導統制とか或は地方金融統制と云ふが如き統制の濫用も爰に到つては頗る滑稽を感ぜざるを得ぬ。

更に農相の提唱に係る農業國家百年の大計の内容を見るに、何れも机上の空論に過ぎぬ、何故に机上の空論であるかと云へば、彼れはその技葉末節に亘つた希望を描くに急なるものであつて、何等之が實現に價へすべき根本に觸れざるを恨む。曩の農相が農村の改革に就て殊更世に提唱する迄も無く、從來政黨輩に依てその高遠の理想として常に喋々する所である。爰に於て若し偶々地方民がその所説に感じ、その指導の下に實現を試みんか、概ね淺薄なる官僚の机上の空論に誤まれ或はその直接指導機關たる政黨の好餌となり、或は亦それが政爭の渦中に投せられ畢には地方人士をして回復すべからざる損害を蒙らしむる如き指導者當局の不誠意が地方民をして斯く疲弊困憊に到らしめたのである。

凡そ、事業百般は理想を目的とするも、總ては實際である、即ち實益である、その實益を省みざる事業は成立し得ざるは云ふ迄も無い、而してその政府の統制計畫が地方民の實益に反した場合果して何人かその損害を負担すべきか、或は何人が地方民の利害を背負ふて統制經濟を擔任すべきか、先づ以てその信賴すべき指導機關の根本が確立されなければならぬ。

更に轉じて、國政に就て見るに從來國政に參與する幾多の參政者は地方行政の改善にせよ、その説く所の理想は常に聲のみ大にして多くは空論に了り、何等實蹟の擧がらざるは何故なるか、その日進月歩に刷新さるべき國政がその議政壇上に於て一石の投せらるゝ毎に政爭の禍因を卷起し、その實現性無く暗中に葬られ地方人士をして全く畫餅の失望に終はらしめ常にその名實の伴はざるは世間周知の事實である。

斯くの如く農村の疲弊と云ひ、國政の澁滯と云ひ悉く爲政者の政爭の致す所であつて、之を省みれば地方行政の改善に絶叫する事よりも政黨の走狗を努め地方の産業を

斯く荒廢に歸せしめた已れの改善が先決問題である。

思ふに、此の産業國家統制と云ひ或は農業國家統制と云ひ、金融國家管理と云ひ、畢竟之等の政策は國家社會主義組織の別名に他ならぬのであるか、果して此の國家社會主義が我が皇國日本國家に相應しい改造案であらうか、爰に姑らく論じて見たい。

此の國家社會主義は古く以前から歐洲に於て相當深く研究せられてあつたが、その透徹する所に多くの矛盾を生じその實現性に乏しく遂に問題は取殘されてあつた。而して爰にその歐米の研究を俟つ迄も無く、此の國家社會主義の實施に就てはその理論として一應首肯し得らるゝが、その究極の點に到つて實現性は無い、之を單的に謂へば此の國家主義と社會主義とはその根本の性質を異にして全然その混用を許さない、即ち國家主義は元々國家に支配權を有し、人民の力を國家に集中し、その國家支配の下に政治が行はれるのである。

之に反して社會主義は云ふ迄も無く富の分配を普遍的に平等ならしむる事を目的と

する即ち人民本位にして従つて國家は人民に依て政治が行はれ、其の國家は人民に依て存立するものである、斯くの如く各人がその選を異にする兩者を混合する事は全くその名分の上に不可能である而已ならず、その實際問題に照らして或は我が軍隊の規律整然たるを連想し或は大工場に於て行はれる經濟組織を見て一般の社會組織をして之に律せんとする如きは甚だ恐るべき短見者であらう。

云ふ迄も無く實社會に於けるその一個の家庭には老幼婦女子を伴ひ、而もその家庭に於て各く負担の輕重あり、加ふるに性質の利鈍賢愚強弱實に千差萬別を爲す此の實狀に於て、如何に社會の公平を期する上に千思熟慮するに於ても個々の生産能力に標準を置き之に報酬を給與するより他に良策は有り得無い、而してその無力者に對しては國家は別途に衣食料を供給すると云ふ建前になるのであるが、斯くては一家族中に二個の異つた生活様式が行はれざるを得ず、彼れを思ひ、是れを比ふる時は彼の露西亞共產主義に彷彿たるものがあつて即ち働かざれば喰ふべからずと云ふ、人間の天稟

とその使命の偉大なるを知らず、人間をして十把一策に見積り唯勢力而已を尙ぶに於ては宛ら牛馬と何等選ぶ所の無い低級なる社會を歓迎するに類するものであらう。

元來この社會主義の起源は云ふ迄も無く、歐米の哲學的原理に基き各人の自由平等主義から引用し來つた即ち貧富の懸隔無き平面的な社會組織を理想とする事を指して社會主義と云ふに到つたのである、彼の前世紀の暗黒時代に現はれ正義の身片に斃れたソクラテス、或は人類愛を高唱して殉じた基督も共に自由平等の元祖であつたと稱するが之等は孰れにしても詳かで無い以上批判の限りでは無い。

更に時代は降て歐洲に於ける彼の哲學の大家としてその名を爲せる、獨逸國のカント、プラトン、マルクス、或は英國のスペンサー等々諸大家の自由平等論はいづれもその論據を同じふし、之を極めて包括的に綜合すれば、即ち人間は齊く神の恵みに依て創造せられ、而してその人間生活は凡て神の天興であるが故にその人間にして甲乙ある可からず、飽く迄も自由平等を信奉しその公平を期しなければならぬ而して此の



人間生活の平和を維持するには道德を普遍的原理と成し、この道德に依て國家社會が構成せられなければならぬと釋いである。

爰に於て疑問とすべき事はその云ふ所の道德の標準は何んに依て之を律し得るか、元來自由主義とは譬へ善にせよ、惡にせよ、各人の求めんとする自由なる事が自由の本來であらう、その自由なる事に對し如何にして道德の基準を樹て得らるか、此の場合に於ける道德とは互讓の精神である、此の互讓の精神とは或は國家に對し或はその個人に對しその負ふ所の義務の履行である、斯の義務の履行が（即ち社會的義務の履行が）その自由主義に持合せありとするなれば斷じて自由主義とは云ひ得ぬ。斯かる曖昧なる自由主義が自由主義として彼等の間に於て立派に通ずるかも知れぬが、之を我國に於て云はしむれば得手勝手主義と云ふ外は無い。

之を要するに歐米人の道德論なり或は自由平等論の抑もの起りは、由來過去に於ける歐米の天地には覇者の帝王ありしと雖も未だ曾て仁者の帝王ある事を知らず、從て

帝王と云へば覇者專横の權を奮ひ苛憐誅求を加ふるものなりと信じ、人民はその苛憐誅求を免れん爲に爰に於て一策を案じ、人間は神の子なりと勿體を付け、その人間生活の自由平等論を想へて覇者の重壓を抑へ、或は自家利益擁護の必要上その惡魔拂ひに神の子氣取りは蓋し上出來である。

而して彼等はその國家存立に對して曰く「國家なるものは特權階級を保護し、漁利を收めんとする擄取機關に外ならぬと斷定し、更に斯かる國家に對しては人民議會を起し之を法治體にして牽制すべく、尙之が監督を徹底せしむる方法として別途に人民代表機關を制定し之に依て直接國家の監視を嚴重にすべしと極論するに出でたるは、蓋し常に專横なる覇權者の治下に壓服されつゝある人民としてはその自衛上洵に已むを得ざるものであるが、翻て考へて見れば如何に我國の政治家が低級にしても或は何處でどう血迷ひたるものか、仁者の帝王を以て立てる我が國體とは全く雲泥懸絶の觀あつて絶對に我が國體に相容れざるは明々瞭々であるに拘らず、斯かる壓服政治の法

治體を宛ら先哲遺業の寶典の如くに欽戴し、隨喜の泪で歡迎するに到つた我國政治家學者輩の了見が那邊にありしか如何にも不思議に耐へない。

而して彼等歐米人の自由平等論が果して如何なる實蹟を擧げてゐるか、彼の奴隸解放の犠牲と成つた自由平等の大偉人と謳はれたリンカン氏近くは第二世リンカンと世に崇められた前任米國大統領ルーズベルト氏がその大統領として受ける年俸は一ケ年實に五十万弗の高給であると云ふ、而も彼れは白聖館の金殿玉樓に起居するものであるが、彼れが世に高唱する如く眞に自由平等を愛好するものなれば、何故にその受ける俸給の多くを國民に向つて之を辭退せざるか、若しその受ける事が已むを得ざればその幾何を細民に分與し、自ら以てその自由平等の範を垂れざるか、その彼等の百善の口の下には何處にもその自由平等の認めるものが無い、如く自ら世と欺いてゐるでは無いか、而も彼等の衣鉢を受け、彼等を大聖偉人の如くに崇拜し自由平等を禮讃し之を受賣りしてその地位を贏得たる我國の顯職にあるもの如何、之等も又その歐米の

所謂大偉人に倣ひ、唯巧言を以て人心を操縦するに汲々として何等精神的にも將亦物質に於ても、その言の如く自由平等精神の現はるゝ處無い而已ならず、彼等が一度その顯職に就くに於ては忽ち巨萬の財産を蓄積し得るに到つては、我國仁者の帝王の徳を賣物にし私腹を胞やさんとする亂臣賊子の張本であつて、世の師表として人の風上に置けるしる物では無い。

更に追求すれば、自由と平等とはその根本に於て對立するものであつて決して兩立するもので無い、即ち平等を制する爲に自由を壓するに於てはその自由は當然無視せられ無ければならぬ、爰に於てか自由の社會を求めんとすれば平等の社會は失はれなければならぬ事は多言を俟つ迄も無い。之れのみならず爰に自由と自由との社會も亦之を求める事は不可能である。何故なれば苟も生物である限り、慾望に執着しその慾望を滿喫せんとする事が自由の主張である、その自由と自由との主張が如何にして渾然平和の一致を見るであらうか爰に到つて考ふれば彼等の自由平等論は眞の自由平等

の社會を求めんとするもので無く、その本來の目的はその政治的野望を遂げるべく無理に平和の地に波瀾を起さん爲に民衆をして宛ら闘犬に偽せ、口にその實現の不可能なる自由平等論を絶叫して民衆を煽動し已れの地位を贏ち得る爲に可憐なる民衆をして猛獸の如くに闘争せしめ犠牲にせずんば止まぬ、と云ふのが蓋し彼等自由平等論者の真相であらう。斯かる實現不可能なる自由平等主義がその歐米の天地に於ては偉大なる學術的原理と稱せられ、之を世に提唱するその人物が不出世の英傑の如く崇拜せらるゝのであるが、之を我が國風から觀察すれば、彼等の自由平等主義は全くの得手勝手主義であつてその學術としては遺憾ながら三文の價も無く、之を強いて學術とすれば偽善哲學に類するもので、況んやその主義者に到ては眞に偽善の者の標本と云ふべきであらう。

願ふに、從來我國の學者は動もすれば新奇を衒ひ、海外の學說と云へば無比判に取り入れるの弊風があつて、國民の禍ひとなれるもの世に尠く無い、就中、支那の亂世



を歎き、その亂世より支那を救はんとし、聖人君子の道を釋き東洋の聖賢として世に絶讃せられた、彼の孔子は直接その身を戰亂の渦中に投ずる事の危険を恐れたものか「君子は危きに近寄らず」と喝破するに到つた事の事蹟は餘りにも有名である。併し想像するが如く支那の國情を知る時は、支那に於ては孔子の聖賢の教へが常に他人を籠絡する事の毒饅頭に惡用せられ或は殺人の役目を成すものである、爰に之を引用すれば我國に於て専ら諷刺に用ひられてゐる彼の宗襄の仁である、即ちその宗の襄公が君子は敵を仇せずと告げ敵の楚に同情して却つて討たれたと云ふ事の真相は詳でないが或は楚が襄公の毒饅頭を看破し機先を制したかも知れぬ。古來支那に於ては王公貴族始め官吏商人からその乞食に到る迄或は君子を口にして嘘八百の毒饅頭の盛り比べを成し、その盛り方の優れるものが利益を得或は地位を羸得るのである、而もその支那に於ては三才の幼兒が兩親の嘘を耳慣れてその嘘の稽古に勵んでゐると云ふ事で、彼等は嘘を悪いと信じてゐない事ゝ賢者の途と心得てゐると云ふ。之を省れば流石の

孔子もその藥の盛りが過度なるに自ら惧れを成したもののか或は衆生の濟度し難きに悲鳴を擧げ三舍を避け得ざるべく「君子は危きに近寄らず」は天晴れ先見に明ある孔子たるの所以であらう。尙之を深く考ふれば一般支那の識者に於てもあつたら毒饅頭の製造者として世に貢獻したる孔子に對し聖賢として絶大の讃辭に各ならずして崇拜するものであるが、蓋し彼の孔子は支那に於ける支那式の聖人たるの特色を失はぬ。

翻つて支那人が孔子を崇拜する氣持を日本精神に慙ぶれば、元より孔子の釋く所の忠孝仁義の道は誠に尊敬に價ありと雖も、その君子は危ふきに近寄らずと云ふに到つた此の一言に依つてその孔子に對するの尊敬の念は宛ら十年の戀一日にして冷却せざるを得ぬ。

何故なれば譬へ彼れが單なる學者にせよ、苟も同邦の亂世を歎き、天下に人道を説いて、世を匡救せんとする賢者が、仮令如何なる場合にせよ宛ら賢者は必ず危險に立たず、即ち賢者は已れの身を護り危險を避ける事が賢者の賢者たるの途であると云ふ

如きは、我が日本精神から考ふれば賢者として眞に恥すべき卑怯卑屈者と断せざるを得ぬ。

云ふ迄も無くその日本精神に於て苟も世に賢者と譬ふる限りは、その素志を貫徹すべく卒先して身命を賭し、その魂を打込まんとする純情なる所に眞の賢者を見出すべく、爰に精練せられたる日本精神の結晶がある。然るに從來吾が識者間に於ては斯かる孔子の言説が或は聖人の教へとして信奉せられ、其の孔子の言説に隠れ卑怯卑屈を敢て愧とせざる偽善者が得々として聖人君子を装ひ、日本精神を忘れたる功利主義の偽善者が世に跋扈するに到つた事も掩ふべからざる事實であつて、今日我國指導者の多くは從來孔子の言説を毒饅頭に悪用し來つた支那人を嗤へざる程その狡猾に長じ、卑屈に威け日本精神の墮落を見るに到つた事は彼の孔子の中毒が大に與かつてゐる爰に之を綜合すれば曩の歐米の自由平等主義と云ひ、或は又所謂孔子の聖賢の教へと云ひ、之等を我が國風に照して見れば孰もその言行一致を缺き辻褄の合はぬ腑抜け

た事柄であつて、之を嚴格に批判すれば寧ろ異端邪説に類し、我が日本精神を腐敗せしむるものである。斯かる異端邪説に齊きものが從來我國の國民教化の上に聖賢の教へとして禮讃し或は歐米の自由平等の假面を被つた、偽善哲學が我が最高學府に於て國家組織の基礎となり、或は國民の指導精神として尙ばれ、之がその人材を造るべく或は英法科と稱し或は佛法科、獨法科等々と一々銘を打つて世に輩出せられ、その多くは曲學阿世の徒や或は日本常識を逸脱し、日本精神の氣魄に缺けた功利主義の標本として現はれ、然らざれば三百か俗吏以上の羈絆を脱し得ないのは是非もない。斯かる手合が支那歐米の偽善哲理の使ひ分けを巧みにし、私利私慾を逞ふし或は政治の原動力を成し、以て政治を恣にするものであるが、今日の國難を省みる時は眞に慨嘆に耐へぬものがある。

熟ら、思ふに世人或は現下の我が國體の容易ならざるを慮り、或は遠き昔時の偉人を尋ね或は日蓮に或は親鸞等々の師を偲び、今日の政治の膳立に或は明日の教育に宛

ら其の位取りをその教義に照合せんとする如きは、この實社會の慘狀を克服すべく餘りに縁遠き恨みはありはせぬか、勿論吾人は些かも各人の信仰に對して非難を加へんとするものでなく、我が國民は古きを尊び、新らしきを迎ふる處に我が國民の賢明さがある、此の賢明なる事が我が國の傳統として美果ならしめ、一步一步健實なる進歩を辿る所に我國の恒久性を有する事は云ふ迄もない。

併し所謂老國の通弊として動もすれば有爲の士が實社會の芥界を見限り、超然として信仰に入り或は聖人君子の道を説き、之を以てこの亂世に於てその改革の一助たらんとするものであるが、今日の國難を的確に表現すれば或は聖人君子に或は王道に隠れ、羊頭狗肉を賣る偽善者の横行時代である、而もその偽善者の多くは師表に立ち聖人君子を装ひ、筆舌を逞ふし、その甚だしきに到つては、その醜惡顔に泌み出でるにも拘らず、尙身を國家の要職に置き釋然たるものがあるが濟度すべからずとは眞に此の事であらう。爰に到つて考ふれば近時澎湃たる赤化思想の現はれは或る意味に於て



此の偽善時代の雰圍氣の生んだ犠牲者とも云ひ得られ。殊に現職判事教育者學生の如き、その到つて眞面目なる方面の多くが赤化するに到れる事は明らかに彼等をしてこの偽善時代の回復をその絶望に陥らしめ、竟に焦慮の餘りその選ぶ處を誤まつた事は洵に遺憾に耐へぬ。之を省みれば今日の偽善者横行時代に於て殊更壁石混同する如きは却つて益々偽善者の横行を増長し、その猖獗を極め竟に實害の及ぶ所測るべからず、既に人心も亦單なる聖人君子の教へに對しては正しく受入れず眉唾に視し、正邪曲直の道に迷ひ、或は却つて世の誤解を招くの惧れあり、斯くては衷心から人心の方正の努力は畢に水泡に歸するを保し難く、此の前述の意味に於て、如何にして此の偽善時代を克服すべきかを考ふれば、聖人君子の道、或は高遠の理想元より可なり、然りと雖も此の國家多事多端に際し如何にして一日も速かに宸襟を安んじ奉べきかを顧慮せば、自らその感激の中に時弊匡救國難打開に就ての名案が發見せられ之に向つて大に緊樞一番しなければならぬ。

惟ふに、現下に迫る我が國家改造の上に最も緊要なる事は、純正皇道日本國家改造の上に於て苟も我が皇道の本義に悖る如き海外文物制度或は風氣風俗習慣は一度之を綺麗に精算するを急務とす。而して此の純正皇道日本國家改造に就て、從來我國の識者は吾が國體の原理を説き或はその精神を國民に向つて植付けるべく、余りに高遠の理想に過ぎ或は難解に陥り國民の實生活に觸れるべく甚だ縁遠い觀無きを得ず、その結果多くは名實伴はずその高遠の理想が竟には支那の聖賢の教への如く却て毒饅頭化さるるを得ざるべく、爰に到つて考ふれば今後の皇道精神の宣揚に對しては悉く國民の實生活に觸れ効果的に一貫されて無くてはならぬ。

云ふ迄も無く我が皇道とは至善至高の御聖德である、而して日本精神とは之を單的に云へば其の皇道の精神に副ひ奉る事の爲に活動の作用を起しその實蹟を現はす事であつて、即ち日本精神はその言行一致を期する事である。之を思へば單り我が天皇の御聖德は益々高く、萬民の感激措く能はざるものと雖も、その御聖德を顯はすべき今

日の日本精神は皇道を外れて墮落し羊頭を吊げて狗肉を賣る底の皇道を賣る偽善者の看板を成すに到つたのである。

之を要するに今回の吾が國家改造は眞の國家改造を翹望し、過去半世紀に亘つて民主主義に培はれた過まれる思想に對し之を徹底に是正し、而して我が皇道の大本を根基として之が言行一致實踐躬行の實蹟を舉げる上に眞の新に日本精神の活躍を望んで止まぬ。

更に検討すれば、此の國家改造に先立て世人或は理想的國家改造を企圖する上に、その徹底する意味に於て或は皇道と社會主義とは全く薄紙一枚の差異を生ずるに過ぎぬと解せられ、その改造の究極に於て社會主義も皇道も唯薄紙一枚の差異なれば爰に社會主義を選ぶ事も或は皇道に依るともその國民生活上に變り無ければ孰れを選ぶとも差支は無いで無いか、寧ろ手近かなる方法を選ぶ事が賢者の採るべき途であらうと云ふ議論が世に尠くなく、殊に政黨者流の論據は當に是れである。

斯くては宛ら不正に依て得た金銭も或は正しい途に依つて得た金銭もその價值には變りはないと云ふ議論に齊しいのである、即ち皇道と社會主義とが因て起る所の原因が異つて居ても、その究極の點に於て或はその結果に於て或はその枝葉末節に於て社會主義と似て非なるものであると云ふ解釋の起る如きは眞に心細き限りである、是の如き我が皇道と云ふ至上至高の道德がその威信を傷けられるに到つた事は云ふ迄もなく從來この社會主義政治治下に於て唯物主義の爲に壓倒せられた結果、實質的にその價值が失はれ僅かに哲理に於てのみその價值を存在するに到つた事は洵に慨はしき次第である。

その今日の識者が皇道の極端は社會主義なり、社會主義の極端は皇道なりと曲解せられるに到つた事も甚だ無理からぬ事であるが、之を要するにその歐米の道德論と云ひ、或はその社會主義と云ひ、自由主義と云ひ、前述の如くその根源を辿つて見れば孰れも正しい根底無く偽善主義である事は容易に看破し得られ、翻つて我國の皇道は

現人神に依る至善至高の道德を根源として之が實體を成すものであつて、從て之が如何にその究極に達するに於ても公明正大にしてその歐米の思想原理とは宛ら玉石の相異なる事は云ふ迄も無い。

爰に想到すれば、所謂歐米の社會主義の思想原理なるもの、由來は、その歐米の天地に於てその倫理にせよ、道德にせよ何等の標準無く、全く無軌道の狀態であるが故に一般社會は凡て平面化せざるを得ず、從つてその公に關する是非の判斷はその平板的理想の上に總て數字が尙ばれ、即ち一よりも二が多い、一人の考へよりも二人の考へが優ると云ひ。爰に到つて彼等はより多くの言論を迎へんと欲し、或はより多く輿論の喚起を必要とするは全く己むを得ぬ。

之に反して我が皇道に於ては過去三千年間精練に精練を加へ、そこに人生最高の道德に依つて一貫したる理想の標準が樹てられ、是れのみならず、我國民は天皇の御親政に對して絶對の信賴を捧げてゐるが故に、殊更世の指導者を造るべく輿論の喚起を



必要とし無い、併しながらその有ゆる政治機構に或は之を運用する上に於て天皇の御親政に對し之を輔弼すべく國民の師表たるべき人材の登用を必要とせられ、此の場合その輔弼者に對し或は政治の是非に就て之を批判することは別として、その己れに於て政權を掌握すべき企圖の下に國民に向つてその信賴を問ふ如きは眞に見當外れの質問を發する皇道の破壊者が現はれ、斯くして彼等は國民をして二重人格を造らしめ、國民の 天皇に對する信賴を蹂躪せんとする天下晴れての姦賊の橫行を見るに到つたのであるが、而もその姦賊に呼び掛けらる大衆に於ては爲政者の選擇權無きは勿論選擇眼を有せざる大衆がその吾黨内閣の選擇の任に當るが如きは眞に奇怪と云ふべきか或は滑稽と云ふべきか、更に驚く可きものは彼等を監督する地位にあるものである。

爰に於て我國の政道は皇道を本とし、その政治は 天皇に依て行はれ、而してその登用さるべき多くの人材は、其の能く皇道を遵奉し、尙政治的達識の士の選擇眼に依て拔擢せられてこそ、立派なる適材が得られる事は世に一點の疑ふ可き餘地がない。

茲に彼我を對照すれば理論上その孰れが正しきか自ら鮮明なるに到るであらう。更に細に入り、彼の歐米の所謂社會主義の思想原理とする自由平等論は前述せし如くその根底に於て或はその實現に就て何等價值あるもので無く之を一笑に附するにしても或は此の自由平等と云ふ言葉に拘泥せざるにしても、我が皇道に於て此の自由平等と云ふ事柄に對して之を閑却する事は出來得ない。必ず爰にその對象となるべき原理が無くてはならぬ筈である。されば尊皇護國を以て唯一絶對の原理とする我が皇道に於ても公私の道は自らその明かなるものがある、そこには大義名分あり、大我小我あり而してその大義に於て自由あり、名分に於て自由あり、大我に於て自由あり、小我に於て自由がある。その基く所孰れも皇道の大本にして隨て大義無くして名分無く、大我無くして小我は無い。而して是の大義名分、大我小我の一致は即ち道德の根源であつて社會の平和は之に依て能く馴致せられ、而も一旦緩急あれば死は鴻毛よりも軽く進んで身を挺し深く國家に殉ずるの忠勇義烈の精神は明かに我が皇道に依て培養せら

れた自由の大我の發露である事を立證するものである、而してその自由の小我の顯はれは各人の天稟の才能を發揮する前に能く大義名分を正す事を必要とせられ、爰に正當なる自由を得、その自由の天地に向て驥足を伸長しその天才を奮ひ、一世の英雄たらんものは英雄たれ、或は富豪たらんものは富豪たれ、或は貧乏するものは貧乏せよ、窮すれば黷て通するの通があらう。

此の我が皇道を正しく認識する上に於て、吾々國民は我皇室の天壤無窮ならん事の祈りを捧げる如く或は人は一代名は末代と稱ふる如きは畢竟吾が皇祖皇の御遺訓に因る我が皇國の宏大無邊の理想を貫徹すべく、その一代に於て完成し能はざる所から、そこに至善至高の皇道の必要が認められ、爰に於て吾々現人は祖先の遺業を謹んで繼承すべく、その大なる義務を果たす事と興に、更に後世の爲に誓て貢獻する處無くはならぬ。然るに後世の爲に重大なる責任を負へる現人に於てはその限りある生命、その限りある能力、その限りある生産力等々を顧慮せば、飽く所なく己れの慾望を満

さんとする爲に多くを犠牲にし餘す所なく、凡て一生を以て事足れりと云ふ如き我が皇道本來の精神に悖る淺薄なる思想行爲は我が皇道の徹底する上に於て之を完全には正しなければならぬ。

爰にその結論を求むれば、彼の歐米の自由主義と云ひ、社會主義と云ひ、その主義に於て齊しく彼等はその心底に一物の愛國心無く祖先崇拜心無く加ふるに親は親一代なり、子は子の一代なり、と眼中利己あるのみ、跡は野となれ山となれ、と宛ら野ら犬の如く無責任なる集合世帯の人間中間に於て、偶々世の有福なる階級に對する懊惱の反映から出發し、他の富を切り崩し之を一般に均等せんとする詭策が、煽動政治家に依て案出せられたのであるが、彼等がその理想とする如き社會主義の天地が歐米何處に於て發見し得るであらうか、その實現の不可能なるは云ふ迄も無く斯くの如きは全く彼等煽動政治家の手品の種である事は最早爭ふべくも無い。

現時世の思想混亂の折柄、我が學界方面に於ては眞の我が國家組織の原理を發見す

べく社會科學と稱せられ隨所に研究機關が設置せられてゐると云ふ事は極めて結構である、併しその確聞する所に依ればその學術研究の材料の多くは所謂歐米の社會主義を基本とするものであると云ふ。翻て考ふれば我國には國體の研究者多くありと雖も未だ我が國體を國民生活の實際に一貫したる究究機關なるものを見ず、即ち單なる社會道德とか或は德義と云ふので無く、即ち我が皇道を徹底せしむる上に現在の社會組織の缺陷を完全に補ふに足る方法である。

例へば、現在我國の選舉方法である、その選舉場裏の光景は宛らガラタ道具の競り賣りの狂態が演ぜられ、その人格劣等なる彼等の策動は、心あるものをして眞に聲を禁じ得ざらしめ、國家の威信は全く彼等に依て傷けらるゝるに到つたのであるが、之を省れば今日の思想國難の主因は眞に此の選舉制の害毒にありと云ふを得べし。

由來政黨人はその選舉民に對し、得意然としてその公人に立つ事を指して國民の忠僕なりと稱して、當選の名譽を辱ふすべく哀訴歎願し止まざるものであるが、彼の歐



米の民主國に於ける國家は人民の共有共立する國家であつて、從てその公人及び公職は事實人民の使者に外ならず何等の權限無く事實その人民の公僕であるに相異無く、之を忠僕と稱する事は敢て失當でも無ければ、強ち謙讓なる所以でも無い。

翻て吾國の公人及び公職は斷じて然らず、即ち我國の政治は吾が皇祖皇の遺烈とされる皇道を未來永却に亘て一貫する事の爲に、天皇親から皇道の範を垂れ給ふ事のその皇道が即ち政治であり、且訓へである從て吾國の政治は正しく天皇の訓へなのであつて、その訓へに立つ公人及び公職にあるものは云ふ迄もなく師として世の儀表となるべき仁人賢者で無くてはならぬ。

さればその登用さるべき人材は云ふ迄もなく清廉にして識見高き人格者を必要とせられ、隨てその嚴肅なる意味に於て人材の選舉にはその人選を誤まらざるべく齋戒沐浴して之に當らなければならぬ。而してその被選舉者に於ては飽く迄も謹嚴謙讓の態度を以て之を迎へ、苟も不遜の態度あるべからず。

斯くて世の百弊千害の禍因を究むれば、現在の過まれる選舉制に端を發せざるもの無く爰に到つて考ふれば改革の諸問題を眼前にし或はその内政會議に或は農山漁村の改善等に具體的成案を見ると雖も、此の惡弊の源を成す選舉制の完全なる改革を見る事無くして他の枝葉に涉る改革の如きは全く砂上に樓閣を築くに等しかるべく、此の場合最も緊急を要する事は政治の原動力である、參政者の發祥地をその民道に依て之を求めるか或は皇道に因て之を求めるか其の根幹が一貫せられて爰に始めて枝葉に亘つた政策が能くその根本に合致し得べく、然らざればその根を求めずして實を得んとする如き未來を顛倒する結果は、茲に再三改革の煩が生ずることを豫期しなければならぬ。

本章

更に局面を一轉し、眼前の我が國家改造に先立て果して我が國民にしてその歐米人と伍し自給自足し得らるゝかと云ふ點に就て吾が國民はその精神方面の訓練は能く行届き充二分の發達を遂げその海外人に優れるとも、偕て其の科學的智識に於て、彼の

明治初年以來文物制度を海外人に求めざるを得ざりし点に鑑み、我が國民はその科學的智能に就て海外人に劣れるもので無いかとの觀察は眞に誤まれるの甚だしきものである。思ふに明治初年以來今日に至る過去六十余年の此の絶大なる吾國の發達は斷じて海外人の建設に俟つたものではない。云ふ迄も無く明治以前の我國の政治組織は元より武門に依る封建制であり、その上統制無く群雄割據の觀無きを得ず、隨て他藩に對し氣兼遠慮から世の激變を好まず而もその鎖國時代の通有性として孰れも事勿れ主義を採り質朴を旨とし、單なる士農工商を墨守し、その學問としては神佛兩道其他忠孝倫理道德或は書畫等に親む事に限定せられ、偶々科學的天才を見出すに於ては、彼等の科學的天才が却て他に紛釀の種を蒔く事の惧れあるを抱き、その科學者の輩出を懼れ、その根絶を期する爲にその科學者は憐れにも無辜の刑罰に處せられ來つた事は我が歴史の能く之を証明する處である。

然るに明治維新を迎へ天皇統治の下に君民一體の國家となり、庶民の天才智能は自

由に開放せられ、世に深く埋藏せられてあつた各人の天稟の才能はその自由に任せ發揮し得らるゝに到つたのであつて、今日に於て見る我國の驚異的長足の進歩は決して偶然に非ざるべく、斯く觀來すれば精神方面は勿論その科學的天才に到つても海外人に優るとも毫頭劣れるもので無く、吾々國民は爰に確信を抱き吾々大和民族獨特の天才的技量を發揮し文明の先驅者たるべきである、而して世人或は我國がその將來を共に歐米の文物制度に倣はざれば國際的に中間外れと成り、その樽俎の間に不利益の立場に置かるゝ如くに考ふる事は全く誤信謬見と云ふべく、俗に云ふ土地變はれば品變ると云ふ處に國際的に多くの妙味があらう。されば日本の天地に於て日本固有特色のある事は當然にして之を發揮するに何人の遠慮氣象がある。之を顧へばその眼前に横はる我國の國難は全く我が風土國情に合致せざる歐米文物制度を過度に取り入れた矛盾缺陷より發生したるものに外ならず、從て此の國難解消の途は勢ひ歐米文物制度の精算を必要とすべく、此の意味に於て從來世の非難の的となれる、猫も杓子も海外留

學が一種の慰勞見物の如くに行はれ來つたのであるが、その我國に資す所概ねその價值あるもの至つて少く、その害惡の甚だしきを省みれば、その海外留學の必要に對しては嚴密な調査の下に行はれ無ければならぬ。

終りに臨んで既に、その卷頭に於て續述せし如く、國家統制經濟を標榜する國家社會主義の實施を望む事は、徒らに國費の膨脹を余儀無くする外、他の一面に於て地方民はその統制者の率ひらるゝ儘に十把一束の去勢に逢ひ、斯くては獨自獨創の發奮を喪はれ、爰に到つて必然產業は疲弊困憊に陷る外は無く、斯くて漸次統制者と被統制者との間に惡氣流を醸成し、而して統制者の之に重誼を加へんとするの結果苛烈なる壓制政治が行はれるべく宛ら政治の理想を過まつた今日の共產露國の如く、その官吏は橫暴專恣を極める、その反面に於て人民はその虐政に苦み恰も生地獄の觀を呈する此の好個の實例に照し、この國家統制經濟なるものが如何に恐るべき結果を招來するか之が一片の空論に了らむ事を望む。



而して彼の國家統制經濟の危險なる事は前述の通りであるが、之を省れば今日の我が地方自治體は全く名のみ自治體であつて、その實は政黨の變則的な寧ろ惡質的な國家統制經濟の治下に掌握せられてあつたと云つて宜い。

元來地方自治體の目標は云ふ迄もなく各人安住を中心にして之を延長し、近隣相和する方法として朝となく夕となく相互に顔と顔を突き併せ得る一區域を以て自治體の根據とする、之に依て能く意思の疏通を圖り、協力一致その自治體擁護に努め、その自治體を擁護する處に各々その特色を有し亦その特色を誇とする所に自治體本來の別天地がある。更にこの自治體をして美果せしむるには國家の力に俟たなければならぬが併し此の場合國家がその自治體に對して容喙がましきは殊に大禁物である。若し一度容喙を試みんか或は余計の干涉と成り或は媚び諂を生じ、動もすれば何事も中央政府に投げ蒐からんとする懼れ無きに非ず、斯くてはその外部から自治體の空氣を紊り、遂には自治體を沒落せしめた噬臍の悔を招くに如す。

之を要するに我國現下の國家改造を必要する此の場合或は地方行政の上に刷新改善を加ふべき懸案と成れるもの多々ありと雖も、中央政府に於てその地方行政機關に對しその最も重要な点は現在の普選をその男女を問はず戸主制に還元する事、兵事及國民教育の如き即ち文武兩道は勿論治安維持は原則として國家に於て之を收め、他事は國家の大綱を示し徐ろに自治體を補佐す、但その自治體にして全く手の届かざる事に限り國家に於て之を補足するを要す。

——(完)——



9.1.22

昭和八年十二月二十三日印刷  
昭和八年十二月二十七日發行

東京市世田谷區三軒茶屋町六七

著者 片山 廉平

東京市麻布區三河臺町十三番地

印刷者 鈴木喜三郎